

# 制度と物質性

—空間マネジメントを捉えるパースペクティブの探求に向けて—

浦野 充 洋

## 要 旨

本稿では、制度ロジックスの議論を手がかりにしながら制度の物質性について検討する。制度は象徴性と物質性という二つの側面を併せ持つものとして提唱されてきた。しかし、これまでの議論では、制度の物質性が十分に検討されてこなかった。この問題に対して、第一に、制度派組織論において物質性を取りこぼさせる原因になったと考えられる技術の取り扱いについて検討を行う。第二に、制度ロジックスを手がかりにしながら制度における物質性を考察し、物質性を含めた制度分析の方法を検討する。第三に、この制度分析の方法のもとで、具体的な分析対象として空間マネジメントについて考察する。

キーワード：制度派組織論 (Organizational Institutionalism)、制度ロジックス (Institutional Logics)、物質性 (Materiality)、制度と技術 (Institutions and Technology)、空間マネジメント (Space Management)

## I はじめに

私たちの世界は、資本主義、民主主義、国家、家族、宗教など、様々な制度によって構成されている。こうした制度は、補完しあうこともあれば、対立することもある。それぞれの制度が固有のロジックを持っているためである。今日の制度派組織論では、このように制度が補完しあったり、対立しながら作り出される現実を捉えるための方法論として、制度ロジックスという概念が提唱されている。制度ロジックスの議論では、制度は象徴性と物質性

という二つの側面から構成されていると考える (Friedland and Alford, 1991)。制度には、言語などによって理念的に構成されている側面と、モノとして物質的に構成されている側面があるというわけである。しかし、制度派組織論は、社会構成主義の Berger and Luckmann (1966) に理論的根拠を求めてきたために、制度が社会的な産物であるという側面が強調され、物質性が取りこぼされてきたことが指摘されている。本稿では、この問題を受けて制度派組織論に物質性を取り戻すべく、制度における物質性について考察する。その上で具体的な分析対象として物質性に根ざした空間マネジメントについて検討する。

以下、まず第二節では、制度と技術の関係を検討することから始める。制度派組織論において物質性が取りこぼされてきた原因が、制度と技術を二項対立的に捉えてきたことにあると考えられるためである。この議論を受けて、第三節では、技術を制度の観点から分析する方法について検討する。続く第四節では、技術の制度分析を手がかりにして、制度における物質性について検討する。第五節では、具体的な分析対象として物質性に根ざした空間マネジメントを捉えるためのパースペクティブについて検討する。

## II 制度と技術の対立

1970年代後半に新制度派組織論が登場して以降、長らく経営組織論において流行してきた制度派組織論であるが、流行は曲解を含めた様々な議論を引き起こす。こうした曲解の一つに、制度が非効率に人々を拘束するというものがあった。それまで主に技術的な効率性を追求することが前提とされてきた経営組織論において、新たな説明様式が与えられたインパクトは大きく、こうした理解の普及が制度派組織論の流行をさらに加速させてきたと言える。例えば、Meyer, Scott and Deal (1981) では、教育機関の組織構造に対する技術的な活動の影響が調査された。教育機関の各教室では、新たな教育方法や教育のための道具が取り入れられるなど技術的な活動が行われていた。しかし、こうした個々の技術的な活動が組織的に取り入れられることはほと

んどなく、組織構造は制度的なルールを遵守するように形成されていた。このことから、教育機関では個々の技術的な活動が組織と脱連結され、組織構造は組織内の技術的な活動ではなく、制度化された環境に適合的に形成されていると考えた。さらに、Scott and Meyer (1991) では、技術的な効率性が要請される技術的環境と、社会的な支援や正統性を得るために従わなければならない制度的環境が与える影響の強さが産業によって異なるという仮説が立てられ、Scott and Meyer (1994) では、教育機関を取り巻く制度的影響の差異が分析されるなど研究が蓄積されてきた。

しかし、そもそも今日の制度派組織論の流行のきっかけとなった Meyer and Rowan (1977) は、ウェーバー (Max Weber) の近代化論に根ざしながら、公式組織において指示される技術的な活動は、制度化されたものであることを論じるものであった。技術的な活動を通じた効率性の追求は、合理化された神話に基づいている。つまり、近代化を経た今日の社会では、効率性を追求することが正統的なことと考えられ、当然のこととされている。そのために、効率的であるとされる公式組織は儀式的に取り入れられているということを提起したのであった。彼らの議論は非効率性を説明しなかったわけではなく、そこで主題になっていたのは効率性である。

こうした議論を受け継いで制度派組織論を牽引してきた研究者たちは、制度が非効率に人々を拘束するという曲解を払拭するための議論を展開してきた。新制度派組織論を代表する論文集となったオレンジブック (Powell and DiMaggio, 1991) のディマジオ (Paul DiMaggio) とパウエル (Walter Powell) による巻頭論文 (DiMaggio and Powell, 1991) は、自らに対して新制度派という名称を掲げながら、それまで新制度派として非効率性を強調してきた議論を批判するものであった<sup>1)</sup>。

1) 制度が非効率に人々を拘束するという考え方は、本稿で議論するように制度と技術を二項対立的に捉える点に由来しているが、制度派組織論でより中心的に議論されてきた二項対立の問題として制度と個人の対立があげられる。この問題を解消するために、制度派組織論では制度的企業家 (DiMaggio, 1988) や制度的実践 (Lawrence and Sudabby, 2006) といった概念が提唱されてきた。これらの議論については、松嶋・

制度が非効率に人々を拘束するという曲解は、効率性が制度的に作り出された基準であるという制度派組織論の理論前提に矛盾するという理論的問題を抱えている。しかし、問題は理論的な議論に留まらない。その曲解によって、技術が制度派組織論の分析射程から取りこぼされてきたのである。制度と技術が対立的なものと考えられてきたために、技術は制度とは異なる技術的環境という背景に追いやられてきてしまった (Pinch, 2008)。

この問題を情報技術研究と制度派組織論を架橋することで解消しようとしたのが、Orlikowski and Barley (2001) である。情報技術研究は、技術の物質的な特性から現象を説明しようとする。在宅勤務を例にあげると、情報技術研究に基づけば、仕事に情報通信技術が導入されると、遠隔での作業が可能になるために在宅勤務が増加する。しかし、現実には在宅勤務は、それほど普及していない。この理由を説明するのが、制度派組織論である。上司が部下の仕事の様子を監視できなくなる、部下が上司に仕事している様子をアピールできなくなるといった技術とは異なる社会的要因が存在するために在宅勤務が普及しないというわけである。しかし、制度派組織論は、社会的な制度に注目する一方で、情報技術研究が注目してきた技術の物質的な側面を見落としている。実際に人々がいかに情報通信技術を用いながら仕事を進めているかを見てみると、オフィスで仕事をしながら、一部の仕事を家でもするようになってきている。在宅勤務はオフィスでの仕事をなくすのではなく、オフィスでの仕事を補完しているのである。彼女らは、こうした実践を見いだして、ネットワーク化されたコンピュータの物質的な特性が、産業資本主義において長期に渡って維持されてきた家庭と仕事という制度的な境界を変化させてきていると結論する。しかし、この説明様式では、従来の制度的な境界を変化させる、制度化されていない情報技術が前提にされている (Bridgman and Willmott, 2006)。

こうした問題に対して、技術社会学者のピンチ (Trevor Pinch) は、技術

---

高橋 (2009) や松嶋・浦野 (2013) などで詳しく論じられている。

も制度化されたものとして捉えていかなければならないと主張する (Pinch, 2008)。しかし、制度化された技術とは、どのように捉えられるのだろうか。ピンチの議論では、技術も制度であるということに対して根源的な説明がなされているわけではない。

### Ⅲ 技術の制度分析

技術を制度化されたものとして捉える必要がある。しかし、制度化された技術は、どのように捉えることができるのか。近年の制度派組織論では、制度ロジックス概念のもとで制度分析の方法論が議論されている<sup>2)</sup>。Thornton and Ocasio (1999)によれば、制度ロジックスは、個人が物質的な生活の糧を生産、再生産し、時間と空間を組織化し、自らの社会的な現実の意味をもたらす、社会的に構成された、物質的な実践の歴史的なパターン、前提、価値、信念、規則と定義される (p. 804)。例えば、現代の西欧は、資本主義市場、官僚制国家、民主主義、核家族、キリスト教を主要な制度としており、これら制度は固有のロジックを持っている。制度は固有のロジックを持つために時に制度間に矛盾を孕みながら、人々の選好や組織的な利害を形成している (Friedland and Alford, 1991)。

こうした制度ロジックスによって、技術がどのように焦点化されるかについては、二通りの方法が考えられる。第一に、社会の中に様々に存在する制度の一つに技術を位置づけ、分析していくことである。

社会には、様々な制度ロジックスが存在しており、人々は、それらを分離

---

2) 制度ロジックスは、もともと Friedland and Alford (1991) によって提唱された概念である。しかし、すぐに注目を集めるようになったわけではなく、2011年から2012年頃から制度ロジックスに関する研究が急増し、年間で40本程度の論文が公刊されるようになった。その後も増え続け、2014年から2015年には年間で約120本が公刊され、今日では、制度ロジックスを主題とした論文は700本を超えている (Ocasio, Thornton and Lounsbury, 2017)。Ocasio, Thornton and Lounsbury (2017)によれば、制度ロジックスは、実践を捉えるための道具的な概念として定位されている。しかし、道具的な概念と言っても研究者が恣意的に設定して良いものではない。制度は現実として社会に存在し、人々に影響を及ぼしている。つまり、現実に存在する制度が人々のいかなる行為を可能にしているのかを理解するための概念なのである。

したり、混合しながら暮らしている。この観点から制度ロジックスに注目する要点は、制度ロジックス間に潜む矛盾と補完性が用いられながら、多様化していく日常的な実践を明らかにしていく点にある。つまり、制度ロジックスを与件とした予定調和的な議論ではなく、あくまで実践を捉える道具的な概念として利用していく点が重要なわけである (Ocasio, Thornton and Lounsbury, 2017)。

こうした考え方のもとで、近代社会に生きる人々の社会的現実を捉えていたのが、制度派組織論の理論的基盤の一つとなってきたバーガー (Peter Berger) らの議論である。Berger, Berger and Kellner (1973) によれば、近代社会はとくに工業生産と官僚制という、必ずしも相容れない二つの制度に特徴付けられている。例えば、工業生産は、同じ歯車が自動車に利用されることも核兵器に利用されることも可能なように、目的と手段の分離可能性を前提としている。官僚制は、役所でパスポート交付に適正な手続きが必要になってくるように、目的と手段の不可分性を前提としている。いずれも近代を特徴付ける制度であるが、人々は目的と手段の可分性と不可分性を使い分けながら暮らしているのである。

他方で、工業生産と官僚制は補完的な関係にもある。例えば、工業生産は、機械性と代替可能性に特徴付けられ、匿名性を前提としている。官僚制も権限や義務が個人ではなく資格に帰属するために匿名性を高めるように作用する。工業生産の匿名性は、職場を超えて私生活に影響を及ぼし、労働者として人々は均質化され疎外されることで、心理的な避難所を私生活に求めるようになる。他方、労働の場に私生活の匿名化しえない人間関係のやりきれなさからの避難所を求めることもある。官僚制も、台所にある電話台の傍らに掲示板を置いて情報共有を行わせるなど、私生活までも官僚主義的にまとめあげていく一方で、職場でクリスマスパーティーが開かれるなど、官僚制に私生活が持ち込まれることもある。制度の補完性においては、単に匿名性を相乗的に高めていくという一方的な作用ではなく、それぞれの制度ロジックがもたらす波及効果と、その反作用によって織りなされる現実を捉えるこ

とが重要になってくる。

第二に、技術という制度に焦点化して分析していく方法である。先述したように技術が制度化されない存在として扱われてきた背後には、技術が社会的な象徴物とは異なる物質によって特徴付けられる存在と考えられてきたためであろう。この観点から分析を行うためには、技術の背後にある物質性について検討する必要がある。次節では、制度の物質性の考察を通じて、この分析方法について検討する。

#### IV 制度の物質性

これまで制度派組織論では制度の物質性が十分に注目されてこなかった。理論的土台を Berger and Luckmann (1966) に求めてきた制度派組織論では、現実が認知と象徴を通じて社会的に構成されていることが強調されてきたためである。制度を捉えるためのアプローチとしても言語的な側面が強調されることが多く (e.g., Philips, Lawrence and Hardy, 2004)、制度の物質的な側面はあまり着目されてこなかった (Friedland, 2012; Jones, Boxenbaum and Anthony, 2013; Jones and Massa, 2013)。

確かに社会は言語を通じて理解されている。社会科学において大きなインパクトを与えた言語論的転回は、物質も言語を通じて初めて理解されることを明らかにするものであった。しかし、言語の前に物質が存在しているのも事実である (Jones, Meyer, Jancsary and Hollerer, 2017)。制度ロジックスは、単に信念や規範といった抽象物だけでなく、物質的な実践も構成要素になっている (Friedland, 2013)。

制度派組織論において必ずしも物質性が意識されてこなかったというわけではない。しかし、それらの研究では、物質性は慣行や構造と解釈され、分析に取り込まれてきた (Thronton, Ocasio and Lounsbury, 2012)。確かに、象徴的な言語に比べると慣行や構造は可視的なものではある。しかし、それらは物質的なモノではない (Jones, Boxenbaum and Anthony, 2013)。

こうしたなか、制度ロジックスの議論を参照しながら、制度派組織論にモ

ノとしての物質性を取り戻そうとしてきたのが、ジョーンズ (Candace Jones) らである。Jones and Massa (2013) では、フランク・ロイド・ライトによって設計されたユニティ・テンプルを事例に、制度は物質的にモノとして体现されることが主張されている。例えば、教会の尖塔は、神の存在を体现している。そのため、従来、教会には当然のように尖塔が付けられてきた。しかし、ユニティ・テンプルでは、神は空に探し求められるものではなく、人々のコミュニティのなかにいるという信念のもと、尖塔が取り付けられなかったのである。さらに、ユニティ・テンプルは建物の原材料も従来と異なったものが採用されている。石は聖書のなかの象徴であり、石によって造られた教会は比喩的にメンバーの精神的な結束を表していると考えられていた。そのため、従来、代表的な教会は石で造られることが多かった。一般的な教会において、石以外の材料が使われる場合は木か煉瓦であった。それに対して、ユニティ・テンプルは教会として初めて鉄筋コンクリートで建設されたのである。尖塔もなく鉄筋コンクリートで建設されたユニティ・テンプルは、当時の教会として異端なものであった。しかし、次第にモダンの思考が取り入れられたものとして専門家の間で評判になり、学術雑誌などで取り上げられるようになる。さらには、アメリカ合衆国国定歴史建造物に認定され、ユネスコの世界遺産にもノミネートされた。こうしてユニティ・テンプルは専門的にも文化的にも神聖化されることで代表的な教会としての地位を獲得し、その後の模倣を促す存在となってきたのである。

以上のように、Jones and Massa (2013) は制度を体现したモノとしての物質性に注目している。しかし、確かに教会の尖塔は物質的な存在ではあるが、分析においては象徴的な意味合いが検討されているだけである。建物の原材料として新たに採用された鉄筋コンクリートも、コストや建造に要する期間に言及されているものの、その物質が果たした機能が検討されているわけではない。制度の物質的な側面が分析の射程に入れられてはいるが、この分析において、それらが物質的な存在である必要は必ずしもないのである。

制度分析に物質を取り戻す意義は、単にモノを分析の遡上に載せれば良い

というだけではなく、それが物質であるがゆえに果たす機能が検討される点にあるであろう。ただし、ここで改めて気をつけなければならないのが、制度化されていない物質を分析に密輸入してしまえば、制度派組織論の理論前提を損なってしまうことである。こうした問題を、象徴性と物質性を同等に制度的なものとして捉えようとすることで乗り越えようとしていたのが Bridgman and Willmott (2006) である。彼らは、英国の内国歳入庁で、コストを削減するとともに顧客に対するサービスを向上させるべく導入された情報通信技術システムの物質性に注目している。サービスの向上を提唱するだけで、それが実現されるとは限らない。例えば地方の税務署では、8,500台のコンピュータ端末が導入され、スタッフが全ての情報にアクセスすることが可能になることで、一人一人が顧客に迅速に対応できるようになり、サービスが向上したのである。ただし、このとき導入されたコンピュータ端末に本質的な特性があったわけではない。コンピュータに対して、従来のヒエラルキー・システムを水平的なものへと変えられるという期待が重ねられることでその進展のあり方が固められたのである。

以上のように、制度ロジックスにおける物質的な側面を捉えようとした場合、物質に固有に備わった機能を前提にすることはできない。しかし、物質として存在していることで発揮される機能もある。そのため、象徴性と物質性が折り重なりながら発揮される機能を探求していく必要があるのである。

## V 空間マネジメントを捉えるパースペクティブ

本節では、これまでの議論を踏まえつつ、具体的な分析対象として空間マネジメントについて検討したい。制度派組織論に限らず広く経営組織論を見渡した場合、組織における物的環境の影響に関する研究は古くはホーソン実験で行われた照明実験にまで遡ることができる。しかし、ホーソン実験を通じて主張された結論が物的環境の影響を否定し、社会的環境の影響を強調するものであったこともあり、その後の経営組織論では、物的環境の影響が十分に議論されてこなかった (Chanlat, 2006; Hatch, 2018)。

この問題に対して、制度派組織論の議論を援用しながら、物質に根ざした組織の空間性について議論していく必要が提唱されている (Preoffitt Jr. and Zahn, 2006)。空間は象徴的なイメージだけで構成されているわけではなく、物質的にも構成されているためである (Clegg and Kornberger, 2006)。物的環境の影響は物理的な影響だけではなく、例えば、オフィスのレイアウトは従業員の価値観にまで影響を与える (Dale, 2005)。

ただし、本稿で議論してきたように物質に固有の機能があるわけではない。今日、多くの企業で開放的なオフィスが導入されてきているが、開放的なオフィスは従業員に様々な影響を与えることが報告されている。例えば、Procter & Gamble では、新製品開発部門が官僚制的に布置された従来のワークプレイスから区別されたオープンスペースに配置されたことで、従業員間のコミュニケーションが促進され、イノベーションの創出が促された (Preoffitt Jr. and Zahn, 2006)。他方で、開放的なオフィスはプライベートな会話ができない、仕事に集中できないという問題を発生させ、モチベーションと満足度を減少させるという結果も報告されている (Oldham and Brass, 1979)。さらに、開放的なオフィスが従業員間の相互作用を減少させることもある (Hatch, 1987)。開放的なオフィスは、話したい相手であっても作業をしていることが見えるために話しかけるのを躊躇させるためである。閉鎖的なオフィスは、必要がある人に会いに行く途中で他の人に出会うことで、予定されていなかった相互作用を発生させることもある (Hatch, 2018)。このように物的な環境は様々な機能しうることを考えると、物的な空間が持つ多様な機能を捉えていく必要があるであろう。

こうした機能は、本稿で議論してきたような象徴性と物質性の観点から捉えることができる。物質に固有な特性があるわけではないことを考えると、物質に象徴性が上書きされることで、象徴性と物質性は補完的に機能することがあると考えることができる。開放的なオフィスは、オープンなコミュニケーションを促進するという象徴的な意味合いを持ったものと信じられていることが多い。実際にコミュニケーションが促進されていれば、象徴性と物

質性は補完的に機能していると言えるだろう。しかし、物質的な機能が、そこで考えられていた象徴性と対立することもある (Elbach and Pratt, 2007)。実際に、開放的なオフィスは従業員間の相互作用を減少させることもある。物質に固有な特性があるわけではないが、物質はモノとして立ち現れるために、象徴的に期待された通りに働くとは限らないのである (Hatch, 2018)。

以上のように、空間は象徴性と物質性に根ざした機能が折り重ねられて構成されている。本稿の議論を踏まえたとき、これらの機能を捉えていく際に注意しなければならない点が二つあげられる。第一に、物質性に注目する必要があるものの、物質に固有の機能があるわけではないことである。同じ物質でも、制度的な文脈が異なれば、違った機能を発揮する。そのため、その物質がどのような制度ロジックに支えられることで、その機能を発揮しているのかを分析していく必要がある。第二に、しかし、物質はモノとして強制的に機能する側面があることである。物質性に根ざした空間のマネジメントは象徴的に意味づけられた通りに機能するとは限らず、とりわけ物質的にどのように機能しているのか注意を払う必要がある。こうした私たちが考える象徴的な意味とは異なる機能を発揮しうる物質への注目は、私たちが暗黙裡にしていた前提を反省的に見直させることにも繋がるだろう。

## VI 結語

本稿では、制度ロジックスの議論を手がかりにしながら制度の物質性について検討を行った。制度ロジックスは、象徴性と物質性から構成されている。しかし、これまでの議論では制度の物質性が十分に分析に取り込まれてきておらず、物質が議論されるとしてもモノとして言及されるだけであった。それでは、制度ロジックスに物質を取り戻すことの意義は十分ではない。本稿では、こうした議論に対して、物質に制度が託されることで発揮される物質の機能を検討していく必要性を提唱した。

制度派組織論に限らず、これまで経営組織論では物的環境の影響は十分に注目されてこなかった。しかし、今日の経営組織論の嚆矢の一つになってい

る Barnard (1938) においても、組織によって構成される協働体系は、物的、生物的、個人的、社会的な構成要素が複合したものとして提示されていた。本稿で議論してきたように物質性をその射程に入れることで、よりよく組織の実践を捉えることができるようになるであろう。

(筆者は関西学院大学商学部准教授)

#### 引用文献

- 松嶋登・浦野充洋 (2013) 「イノベーションを創出する制度の働き」『国民経済雑誌』 Vol. 207, No. 6, pp. 93-116.
- 松嶋登・高橋勅徳 (2009) 「制度的企業家というリサーチ・プログラム」『組織科学』 Vol. 43, No. 1, pp. 43-54.
- Barnard, C. I. (1938) *The Functions of the Executive*, Harvard University Press (山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳『新葉 経営者の役割』ダイヤモンド社, 1968年).
- Berger, P. L., Berger, B. and Kellner, H. (1973) *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*, Random House (高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳『故郷喪失者たち：近代化と日常意識』新曜社, 1977年).
- Berger, P. L., and Luckmann, T. (1966) *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Doubleday. (山口節朗訳『現実の社会的構成：知識社会学論考』新曜社, 1977年).
- Bridgman, T. and Willmott, H. (2006) “Institutions and Technology: Frameworks for Understanding Organizational Change: The Case of a Major ICT Outsourcing Contract,” *Journal of Applied Behavioral Science*, Vol. 42, No. 1, pp. 110-126.
- Chanlat, J. F. (2006) “Space, Organisation and Management Thinking: A Socio-Historical Perspective,” in S. R. Clegg and M. Kornberger (eds.) *Space, Organizations and Management Theory*, Liber & CBS Press, pp. 17-43.
- Clegg, S. R. and Kornberger, M. (2006) “Organizing Space,” in S. R. Clegg and M. Kornberger (eds.) *Space, Organizations and Management Theory*, Liber & CBS Press, pp. 143-162.
- Dale, K. (2005) “Building a Social Materiality: Spacial and Embodied Politics in Organizational Control,” *Organization*, Vol. 12, No. 5, pp. 649-678.
- DiMaggio, P. J. (1988) “Interest and Agency in Institutional Theory,” in L. G. Zucker (ed.), *Institutional Patterns and Organizations: Culture and Environment*, Ballinger Publishing Company, pp. 3-21.
- DiMaggio, P. J. and Powell, W. W. (1991) “Introduction,” in W. W. Powell and P. J. DiMaggio (eds.) *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, The University of Chicago Press, pp. 1-38.
- Elbach, K. and Pratt, M. G. (2007) “The Physical Environment in Organizations,” *The Academy*

- of Management Annals*, pp. 181-224.
- Friedland, R. (2012) "Book Review: Patricia H. Thornton, William Ocasio and Michael Lounsbury (2012) *The Institutional Logics Perspective: A New Approach to Culture, Structure, and Process*," *M@n@gement*, Vol. 15, No. 5, pp. 582-595.
- Friedland, R. (2013) "God, Love and Other Good Reasons for Practice: Thinking through Institutional Logics," in M. Lounsbury and E. Boxenbaum (eds.) *Institutional Logics in Action, Part A (Research in the Sociology of Organizations, Vol. 39A)*, pp. 25-50.
- Friedland, R. and Alford, R. (1991) "Bringing Society Back in: Symbols, Practices, and Institutional Contradictions," in W. W. Powell and P. J. DiMaggio (eds.) *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, The University of Chicago Press, pp. 232-263.
- Hatch, M. J. (1987) "Physical Barriers, Task Characteristics, and Interaction Activity in Research and Development Firms," *Administrative Science Quarterly*, Vol. 32, No. 3, pp. 387-339.
- Hatch, M. J. (2018) *Organization Theory: Modern and Symbolic and Postmodern Perspectives, 4th ed.*, Oxford University Press (大月博司・日野健太・山口善昭訳『Hatch 組織論：3つのパースペクティブ』同文館出版, 2017年 翻訳の底本は第3版).
- Jones, C., Boxenbaum, E. and Anthony, C. (2013) "The Immateriality of Material Practices in Institutional Logics," in M. Lounsbury and E. Boxenbaum (eds.) *Institutional Logics in Action, Part A (Research in the Sociology of Organizations, Vol. 39A)*, pp. 51-75.
- Jones, C. and Massa, F. G. (2013) "From Novel Practice to Consecrated Exemplar: Unity Temple as a Case of Institutional Evangelizing," *Organization Studies*, Vol. 34, No. 8, pp. 1099-1136.
- Jones, C., Meyer, R. Jancsary, D. and Höllerer, M. A. (2017) "The Material and Visual Basis of Institutions, in R. Greenwood, C. Oliver, T. B. Lawrence and R. E. Meyer (eds.) *The Sage Handbook of Organizational Institutionalism, 2nd ed.*, Sage Publications, pp. 621-646.
- Lawrence, T. B. and Suddaby, R. (2006) "Institutions and Institutional Work," in S. R. Clegg, C. Hardy, T. B. Lawrence and W. R. Nord (eds.) *Handbook of Organization Studies, 2nd ed.*, Sage Publications, pp. 215-254.
- Meyer, J. W. and Rowan, B. (1977) "Institutionalized Organizations: Formal Structure as Myth and Ceremony," *American Journal of Sociology*, Vol. 83, No. 2, pp. 340-363.
- Meyer, J. W., Scott, W. R. and Deal, T. E. (1981) "Institutional and Technical Source of Organizational Structure: Explaining the Structure of Educational Organizations," in H. D. Stein (ed.) *Organization and the Human Services: Cross-Disciplinary Reflections*, Temple University Press, pp. 151-178.
- Ocasio, W., Thornton, P. H. and Lounsbury, M. (2017) "Advances to the Institutional Logics Perspective," in R. Greenwood, C. Oliver, T. B. Lawrence and R. E. Meyer (eds.) *The Sage Handbook of Organizational Institutionalism, 2nd ed.*, Sage Publications, pp. 509-531.
- Oldham, G. R. and Brass, D. J. (1979) "A Naturally Occurring Quasi-Experiment,"

- Administrative Science Quarterly*, Vol. 24, No. 2, pp. 267-284.
- Orlikowski, W. J. and Barley, S. R. (2001) "Technology and Institutions: What can Research on Information Technology and Research on Organizations Learn from Each Other?," *MIS Quarterly*, Vol. 25, No. 2, pp. 145-165.
- Philips, N., Lawrence, T. B. and Hardy, C. (2004) "Discourse and Institutions," *Academy of Management Review*, Vol. 29, No. 4, pp. 635-652.
- Pinch, T. (2008) "Technology and Institutions: Living in a Material World," *Theory and Society*, Vol. 37, No. 5, pp. 461-483.
- Powell, W. W. and DiMaggio, P. J. (eds.) (1991) *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, The University of Chicago Press.
- Proffitt Jr., W. T. and Zahn, G. L. (2006) "Design, but Align: The Role of Organisational Physical Space, Architecture and Design in Communicating Organisational Legitimacy," in S. R. Clegg and M. Kornberger (eds.) *Space, Organizations and Management Theory*, Liber & CBS Press, pp. 204-220.
- Scott, W. R. and Meyer, J. W. (1991) "The Organization of Societal Sectors: Propositions and Early Evidence," in W. W. Powell and P. J. DiMaggio (eds.) *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, The University of Chicago Press, pp. 108-140.
- Scott, W. R. and Meyer, J. W. (1994) "Environmental Linkages and Organizational Complexity: Public and Private Schools," in W. R. Scott and J. W. Meyer J. W. and Associates (eds.) *Institutional Environments and Organizations: Structural Complexity and Individualism*, Sage Publications, pp. 137-159.
- Thornton, P. H. and Ocasio, W. (1999) "Institutional Logics and the Historical Contingency of Power in Organizations: Executive Succession in the Higher Education Publishing Industry, 1958-1990," *American Journal of Sociology*, Vol. 105, No. 3, pp. 801-843.
- Thornton, P. H., Ocasio, W. and Lounsbury, M. (2012) *The Institutional Logics Perspective: A New Approach to Culture, Structure, and Process*, Oxford University Press.